

5月の春岡村

● 端午の節句

五月の節句は、男の子が生まれたときに母親の実家から贈られた「鯉のぼり」や「吹き流し」を庭にたててお祝いしました。また、この日はかしわ餅を作り、魔除けに「菖蒲菰き」といってショウブとヨモギを束ねたものを屋根に並べ置き、夜はしょうぶ湯をたてました。

かつて、普通はお正月に揚げるタコをこの辺では5月の節句に揚げていました。大きいものでたたみ4枚くらいあったそうです。これは隣村の原市（上尾）で大凧が揚げられていたのと、岩槻でも五十畳と三十畳の大凧を揚げていたのに刺激されたものでした。しかし、昭和12年、日中戦争が始まると、物資の欠乏が甚だしくなり、大凧も揚げられなくなりました。



● 新茶

五月は新茶の季節でもあります。

「色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす」

このあたりでは、江戸時代から畑の境に茶の木を一行に植えていました。これは「畔茶(あぜちゃ)」といって、武蔵野台地特有の軽い土の流出防止や風除けを兼ねたものです。明治政府は外貨獲得のため、生糸とお茶の輸出を奨励したので、見沼区周辺でも茶畑があちこちにでき、狭山茶の生産が盛んになりました。昭和2年には春岡村に共同製茶場が設立され、周辺の農家は、茶畑や畔茶の茶葉を摘むと、茶葉の入った籠を背負って製茶所に持ち込みました。

自家用のお茶を取り分け、残った分は売って農家の貴重な現金収入となりました。昭和16年の記録では春岡村で製茶300貫(約1トン)も生産していました。

丸ヶ崎新田のあたりでは今も生垣にお茶の木があちこちに残っています。ギャラリー喫茶「温々」の入り口の野菜の直売所の脇にも植わっています。(平山由喜)

